

私がこの道を目指したわけ

褒められる唯一の方法

私は四人兄弟の三番目に生まれた。姉、兄、妹とキョウダイに恵まれた。周囲からは、「物わかりのいい、おとなしい子」と言われてきた。その理由は、まだ甘え盛りの頃に妹が生まれ、兄が病気を患っていたために、幼い私は、家でおとなしく言いつけを守っていないのはだめだったからだ。

兄の病気はすでに完治しているが、それが治るまで、週二日は通院していたし、年の離れた姉は、妹たちの面倒を見るのを嫌がり、ほとんど毎日、友だちの家に遊びに行っていた。そのため、私の相手をしてくれるのは大好きなビデオだけだった。小学校から帰ると、まず宿題をこなし、洗濯物を取り込み、ビデオを見ながら、一人で留守番をしているのが、私の毎日の放課後の生活だった。

私が生まれたときからすでに、母や祖母は兄につきっきりだったから、すごく寂しかったことはよく覚えている。だから、一言で言ってしまうと、家族からの愛情というものを、小学生の私は感じたことが少なかった。こんな言い方をしてしまえば、両親に怒られてしまうかもしれないが、両親は共働きだし、兄は病気だし、姉は家にいないし、そんな状況下で育ったのだから仕方な

かったと思う。聞き分けのいい、おとなしい子でいることは、幼い子どもが考えた、唯一褒められる方法だったのだ。

環境が性格を決める

そんな子どもに育ってしまった私が通っていた小学校は、クラス替えなど一度もないような少人数の学校だった。6年間で変化があつたことと言えば、転校生が何人かいただけだった。それゆえに、みんな幼なじみのような存在だった。ライバル意識というものほとんどないに等しかった。課外活動も、人数が少ないため、入れば即レギュラーという環境だった。他の学校では選手として通用するはずもなかった。勉強も同じで、実力テストなどをして、少しだけがんばれば学年一位などは簡単に取れた。

ここまでをみると、田舎にはどこにでもありそうな学校という印象かもしれない。だが私は、運動会や文化祭など行事における団結力はすごく強かったことを覚えている。クラス全員が一人一人の性格や長所・短所を把握していたからできたことなのだと思う。年上の人たちも、お兄さんお姉さんという振る舞いはせず、友だちという感じだった。先生も人数が少ないからすぐに名前と顔を覚えてくれるし、誰がどのような性格なのかも、理解してくれていた。学校にいるみんなが理解者だった。

すごく過ごしやすい環境だった小学校は、私にとって、とても居心地のいい場所だった。家にいても、私の気持ちをわかってくれる人は少ないと思っていた当時は、学校にいる方が気楽で楽しかった。しかし、この「誰もが理解者で、それでいて自分が一番」

という状況が、私の性格をどうしようもない、わがままに育てあげた。ただ、私はこの環境で育ってきたことを一度後悔したこともあったが、これはこれで良い経験になったし、小学校が大好きなことは、いまでも変わりはない。

大好きだった友だち

そして中学校。一番の仲良しだった友だちは引越して離れてしまい、違う学校に行くことになってしまった。そのため、中学校でやっていける気がしなかった。部活動は入部しなかった。バレーボール部は、県内でも有数の強豪チームだったため、とても練習についていけないと思いい、恥をかくくらいならやめておこうと思いい、文化部を選んだ。

一年のころは、同じ小学校からきた子とほとんど一緒に過ごしていたため、ほかの小学校出身の友だちは、ごくわずかだった。そのごくわずかな友だちの中に、一人だけすごく仲良しになった子がいた。昼休みや放課後も一緒に過ごすことが多くなり、中学校へきて、初めて好きだと思えた友だちだった。

その子は、とても面白い子で、なんでもはつきり言える子だった。今までの私の友人にはいなかったタイプで、すごく新鮮だった。趣味や好きなものが似ていたので話もしやすかった。

彼女は小学校が大好きだった。私も同じように小学校が好きだったが、彼女はさらにその上を行くくらいに好きだった。よく小学校時代に戻りたいとか、そういうことを言っていた。「よほど友だちに恵まれていたのだ」と思ったのと同時に、「今の友だち

ちである私では不満なのだろうか」とも思った。でも、思い出を振り返ったりすることは何も悪いことではないので、さして重く受け止めなかった。彼女は本当に面白いし、新しいことをたくさん教えてくれたので、一緒にいることの楽しさのほうが私には大きかった。

しかし、とある事件でこの考えは一変した。その事件で被害者と加害者という立場で説明するならば、私は加害者であり、被害者である。なぜなら、その事件を起こした加害者は私と彼女なのだ。と同時に、その後の彼女のとある言動で、私は深く残念な気持ちになったため、私は被害者でもあると思う。

今でも、当時、彼女と一緒に行動していたことを後悔したこととはないし、友だちにならなければよかったと思ったこともない。ただ、お互いにもう少し思慮深い行動ができていれば、今でも仲良くできていただろうと思うことはある。

信頼はすぐに失われる

その事件とは、中学二年の運動会のとくに起こしてしまった出来事だ。

私と彼女は、前々から「運動会」を休もうと言っていた。彼女は、元々身体を動かすことが嫌いで、週に2回の体育の授業さえ嫌がっていた。運動会を休むことを提案してきたのも、彼女だった。私はクラスが嫌いだった。クラス全体がというより、一部の馬が合わない人のことをひどく嫌っていて、その人がいるクラスが嫌いだった。今思えば、とても身勝手な考え方だと思うが、

たつたそれだけのために運動会を休んだ。

運動会当日、担任の先生から昼前に電話がかかってきた。普段、病気などで学校を休むときは親が電話をかけるのだが、そんな自分勝手な都合で休むのなら自分で連絡を入れるように言われ、仕事に行った。私は面倒だったので、連絡を入れなかったのだ。

電話の向こうの先生の声は、少し焦ったような、いらついているような声だった。少しビクリとしたが、「お腹が痛くて休みます」としらを切った。「本当にそうなのか」と追及されたが、「本当です」と言つて電話を切った。実は、私の家は中学校から近くにあった。だから、運動会で流されている音楽は、朝からずっと聞こえていた。それが耳に入ったときから、私は既に少し後悔していたのだ。「楽しそうだな」、「行けばよかったな」と。

翌日、学校に行くと、クラスのみんなの目が冷たく、私たちを見てヒソヒソと話す人もいた。昨日休んだのがそんなに気に入らないのか、ほかにも休んでいる人はいたのに、と不満に思っていた。そんなとき、担任の先生から呼び出された。

呼び出されたというだけで、何か悪いことがばれたのかと思つたが、私には、呼び出される理由が皆目見当つかなかった。会議室のような部屋に入ると、担任の先生は、非常に怖い顔をしていた。私が席に着くなり、先生は持つていた紙を見せてくれた。それは私のブログを印刷したものだ。それがどうしたのだと思つた。

先生は朗読し始めた。最初はなんのことかわからなかったが、

すぐにその内容を思い出した。それは、運動会前日に書いたブログだったのだ。何を書いたのか、今では忘れてしまったが、クラスを批判した内容だった。クラスで作った運動会の旗のデザインへの不満から始まり、どうせ、三年生である先輩たちが優勝するのだから、私たち二年はがんばつたところで何になるのだ、馬鹿らしい、というようなことを書いたと記憶している。そしてその記事の最後には、「面白くもない運動会を明日休みます」ということも書いていたと思う。

担任は朗読し終わると、身体をプルプルと怒りに震わせながら、強い目線で私を見ていた。手が震えた、汗が止まらなかつた。クラスや学校に対して、誹謗中傷とも言えるようなことを書いていたため、担任はそのことにひどく怒っていた。

「一生懸命に楽しんでる子がいるのに、どうしてこんなことができるのか」、「人のことを馬鹿にできるほどの立場なのか」と責め続けられた。「この件だけでなく、あなたの日頃の発言には目に余るものがある」とも言われた。

確かに、クラスが嫌いだったから、何か行事があるたびに、批判していた。しかし、まさか、先生に聞かれていたとは思ひもしなかつた。そして、一緒に休んだ彼女の名前も出され、彼女のブログも指摘された。彼女は、私よりもっとひどかつた。学校に関する不満、クラス、特定の人物への誹謗中傷を、毎日のように書き続けていたからだ。

後悔と反省と「自称友だち」

学年主任、生徒指導主任、担任の先生たちと一緒に、ブログをしていた友だちが部屋に呼び出され、ブログを閉鎖することになった。

私たちがしたことでも他の子に迷惑をかけることにもなってしまうので、私は心から謝った。その子たちは許してくれたが、私は自分が許せなかった。先生がこんなにも怒り、みんなからの白い目が怖かった。小学校からずっと一緒にいた友だちも離れていくようになってしまった。こんなことになるなら、しなければよかったと後悔したし、反省もした。

しかし、もう一人の加害者である彼女は、全く反省の色を見せなかった。むしろ、復讐心に燃えたぎっていた。ブログには、「検索避け」を設定していたのだから、誰かが先生たちに教えるければこんなことにはならなかった。いったい誰が告げ口をしたのか、と犯人探しをしていた。何人かの候補を見つけると、その子たちがしている悪いこと、その子たちのブログなどを学校ホームページで送ったりしていた。

私は、「そんなことをするくらいなら、反省しようよ」と彼女に持ちかけた。「悪かったのは私たちだし、こんな報復したってキリがないのだからやめよう」と言った。彼女はその場では了承していた。「そうだね」と言ってくれたので、やっと、ことが収まっていくと思っていた。

しかし、彼女は新しくブログを開設し、今度はそのブログで私のことを書くようになっていた。そのブログで私のことは、「自称友だち」と書いていた。私が彼女の犯人探しと犯人への報復に協

力しないから、「自称」なのだという。これを見て、正直、意味がわからなかった。彼女の考えにはついていけなかった。それからだ、彼女への信用・信頼を失ったのは、私はクラスの人からの信頼を失い、先生たちからの信頼も失い、さらには唯一なんでも話せる友達だった彼女からの信頼も失った。代わりに、私も彼女への信頼を失った。

養護教諭の偉大さ

唯一、なんでも話せる彼女からの信頼と、彼女への信頼を失ってしまった私は、どうしたらいいかわからず、保健室へと向かった。

「頭痛がするし気分も悪い」と体調不良を訴えたのに、先生は「何かあったの」と声をかけ、私が話しやすいように引き出してくれた。きっと、先生は私がどういふことをして、どういふ状況なのか知っていたのだと思う。だから、「話してみなさい」と言ってくれたのだろう。一つ一つ、丁寧に説明して、「どうしてこんなことになってしまったのだろう」と話した。

すると、「まず、反省しようと言ったのはよかったよ。あなたが言ったことは間違っていない。でも、彼女は、友だちだから一緒に仕返しをしたかったんだろうね。『もうあの子とは合わない』と思うのなら、別に無理に友だちでいる必要もないんだよ」と言ってくれた。

私の発言が間違っていないと言ってもらえてホッとしたし、「無理にいない必要もない」と言われ、肩の荷が下りたような気がし

た。なぜなら、彼女はあれ以来毎日のようにブログを更新し、その度に私の悪口を書くようになっており、それなのに学校で一歩に居る間はいい顔をするのだった。私がブログを見ているのを知っているのに、なぜそういう態度をとれるのか私には理解できなかった。そんな彼女というのが苦痛になってきていたから、先生にそう言われ、気が楽になった。

それからしばらくは、保健室に近況を報告しに行くようになった。先生は、私の性格をよくわかっていて、時に厳しいことを言っても、的確なアドバイスをくださった。そのおかげもあり、彼女と距離をとるようになってからは、うまくいくことが多かった。彼女を批判するわけではないが、ある程度の距離をとりつつ関わるのがよいのだと思った。

それまで、「保健室の先生」という存在をあまり意識したことはなかった。しかし、この頃から、本当はこの先生のような方がいるから、私たち生徒が安心して学校生活を送れているのではないだろうか、と考えるようになった。それからだった、「保健室の先生」という職業に興味を持ち始めたのは。

この道を目指した理由

先生のアドバイスを受けてから、新しく友だちもできた。そして、今でもその子とは仲良しで大好きな友だちだ。そんな友だちができたのは、「保健室の先生」がいたからだと言っても過言ではない。養護教諭を目指そうと思ったのも、このことがあったからだ。

それまでは、近くの高校に進学し、地元で適当に就職できればいいと考えていた。しかし、この事件が私の人生の転機になった。何か身体面での相談をすると、「もしかしたら、こういうものかもしれないから、病院へ行つてきなさい」と言われ、病院に行つてみると、まさに先生の言った通りだったこともある。けがの処置の速さなど、今まで意識したことはなかったが、先生の技術、そして、知識の多さと深さには驚かされることばかりだった。

養護教諭という仕事はいつたどのようなものだろうと思いつ、本やネットで調べると、健康面での管理やサポート、精神面のサポートなど、さまざまな仕事があるとわかった。なにより、看護の勉強をするということがとても魅力的だった。幼い頃は、看護師になりたいと思っていたこともあった。しかし、その夢は諦めてしまい、興味を持った養護教諭という仕事に、看護が関わっていることがとても奇跡的なことだと思った。この先生に仕事のことを直接聞いても興味が深まるばかりで、私は養護教諭になろうと決意した。

この事件がなければ、いま私はこの学校に来ていないし、人との付き合い方も知らなかったと思う。本当にこの事件には、感謝というか、悪いことばかりではないのだと思った。何事も悪く受け止めればそこまでだし、私は良くも悪くもこのことをしっかりと受けとめている。いつか、この経験が活かされる日もくるかもしれない。お世話になった先生を理想とし、憧れの養護教諭になる道を行くと思う。